

平成 28 年度 授業評価・授業研究報告

教育学部FDシンポジウム

石井 浩一（保健体育講座）

日時： 2016年10月27日(木)14:30-16:00

場所： 教育学部本館 2階会議室

話題提供：佐藤栄作、中野広輔・檜木暢子、
福井一真

司会： 杉田浩崇

【企画趣旨】

地域を核とした教育と研究の往還的なつながりを探る

【重要であると考えた点、参考になった点】

1. 佐藤栄作先生からの話題提供：
「坊ちゃん」のことなんて、何も知らなかった

<重要であると考えた点>

○多様な学生が受講する授業の時は、漢字の面白さ、魅力について話すことにしている、という柔軟性、引き出しの多さ。

<参考になった点>

○愛媛には6つのアクセントがあるが、一県にこんなにアクセントがあるのは、全国のなかでも愛媛だけであること。このことは愛媛が実に多様な文化を持つ地域だということだから、今後の筆者の授業、教育活動において有益な知見を得たといえる。

○「地域ならではの研究テーマ、研究がわれわれを救ってくれる」と述べられたのには、共感した。筆者も愛媛に赴任してから、愛媛にいることを強みとして、愛媛の伝統スポーツについてフィールドワークし、研究をしていたからである。

○二流に踏みとどまることは、第一に自分のためであり、それは組織にとってもマイナスではない、という言説。

2. 中野広輔先生・檜木暢子先生・苅田知則先生からの話題提供：

標準的な教育制度ではドロップアウトする危険性が高い児童生徒に対する学習支援の拠点形成プロジェクト

<重要であると考えた点>

○「異才児」の存在

○「異才児」は、類まれな才能を持ちながら、標準的な教育システムから脱落しやすい

○カウンセリング治療目的に通院している異才児も存在する

3. 福井一真先生からの話題提供：

「つくりたいものをつくり隊」キックオフ・プロジェクトの取組から

<重要であると考えた点>

○小刀の記載は、「小学校学習指導要領」に昭和22年から続いているにもかかわらず、小刀使用の現状は、“指導する自信がない教員の増加”“使用経験のない学生の増加”“図画工作科や美術科で実施されない”という三者の悪循環が続いている。

○大学と小学校の連携体制の構築

<参考になった点>

○美術＝絵画というのが一般社会のイメージ。そのイメージを少しでもくずしていけたらよいと思う。

○悪循環を断ち切って図画工作科の持続可能な発展を目指す

【授業改善の方策・計画】

本FDシンポジウムを拝聴した結果、自身の授業改善の方策および今後の計画について考えてみた。佐藤先生の話提供からは、多様な学生を相手に授業をする時を想定して、教員は日ごろから様々な引き出しをこしらえる必要があるのだと認識させられた。空振りもあるかもしれないが、視野の広さを持って引き出しを増やしていこう。

中野先生ほかからの話提供からは、類まれな才能を持ちながら、標準的な教育システムからは脱落しやすい子供がいる、というのは以前から話では聞いていたが、本シンポジウムで、大きな問題であることを認識させられた。この話提供から自身の授業改善の方策・計画は、異才児の実態を念頭に置き、教育に当たるとのことだと思ふ。

福井先生からの話提供からは、体育についても体育はからだを動かすこと、スポーツをすることというイメージがあると思うが、今後は「スポーツを知る」ことの重要性を授業を通して広めていきたい。